宗教多元主義と浄土教

一、はじめに

こでこの問題について、私たち仏教、浄土教、ことには親鸞の浄されている。それはいちじるしく国際化し、また情報化も進んで、価値に対する考はいちじるしく国際化し、また情報化も進んで、価値に対する考はいちじるしく国際化し、また情報化も進んで、価値に対する考はいちじるしく国際化してきている。そのような社会的動向をうたが真理であるという排他主義をやめて、新しく宗教多元主義をみが真理であるという排他主義をやめて、新しく宗教多元主義をみが真理であるという排他主義をやめて、新しく宗教多元主義をみが真理であるという排他主義をやめて、新しく宗教の元主義をなが真理であるという排他主義をやめて、新しく宗教の元主義をなが真理であるという排他主義をやめて、新しく宗教の元主義をなが真理であるという排他主義をやめて、新して宗教の正されている。いわゆではなく、多数存在しらるということが唱えられている。

に対しては、賛意を表すべきであると思う。以下そのことをめ的には、浄土教、浄土真宗においても、この宗教多元主義の主張土真宗の立場からは如何に考えるかということである。私は基本土真宗の立場からは如何に考えるかということである。私は基本土真宗の立場からは如何に考えるかという。以下そのことをめ

二、浄土教、親鸞浄土教の立場

ぐって若干の私見を開陳することとする。

受容されてゆくということは、必然的な現象といわざるをえないいては、何らかの形態をもって、先住の文化状況と融合しながらいたある思想、文化が、全く異質の文化的土壌に移植されるについわゆる本地垂迹説といわれる神仏習合思想の展開である。たし日本神道の観念と重層融合しつつ流布されるという側面があった。ものであるが、仏教思想が日本に受容されるについては、伝統のものであるが、仏教思想が日本に受容されるについては、伝統の日本仏教は、中国、韓国を経由して、六世紀の中頃に伝来した

受容され、伝藩していったといわねばならないようである。教本来の意義からすれば、その当初から、いささか屈折しながらであろう。その点、日本仏教は、その伝来、流布については、仏

要とす」(『歎異抄』)とも明かした。その点、親鸞は、従来の仏教 その念仏の内実までもきびしく詮索し、選択して、「ただ信心を のみぞまことにしておはします」(『歎異抄』)と主張したが、また おける専修念仏、親鸞における唯以信心、道元における只管打坐 がたしかに成立することとなったといいうると思われる。法然に に開顕されたわけであり、またそれにおいてこそ、まことの仏道 のである。そしてここにおいてこそ、仏教の本意がもっとも鮮活 教においては、そういう雑修性を悉く排して専修の立場に立った るとして、その教法、行道を選び捨て選び取って専修していった 選択の思想である。すなわち、ただこのことこそが唯一真実であ 鎌倉新仏教の誕生である。この鎌倉新仏教の特色としての性格は の浄土教を先駆として新しい仏教理解が生まれてきた。いわゆる ある。親鸞は法然を継承して一切の雑行雑修を排し、「ただ念仏 の仏道である。その専といい、唯といい、只管という言葉は、ま た異質なものとも重層しながら雑修的であったが、この鎌倉新仏 わけである。それまでの仏教は、多様な価値を同時に包含し、ま さしくこの選択の思想をもっとも端的に表詮するものであろう。 このような選択の思想については、ことに親鸞において鮮明で しかしながら、この日本仏教も十二世紀の中頃になると、法然

三、親鸞と宗教多元主義

親鸞の浄土教、浄土真宗の立場は、すでに上に見た如く、まっ

かならない。

極的真理としての何かを選び捨て選び取るという、そういう究極的世界、仏道は開けてくるわけである。唯一絶対なる宗教的な究教機と、それに対するまったく主体的な思惟と決断、すなわち、契機と、それに対するまったく主体的な思惟と決断、すなわち、的な選択は、伝統的、思想史的な教系に縁あって邂逅するという的な選択は、伝統的、思想史的な教系に縁あって邂逅するというとして選択するところに成立するものであった。そのような宗教として選択するところに成立するものであった。そういう究極的世で、真実だく主体的に、本願念仏、信心を唯一絶対なる究極的価値、真実

実であるという、徹底した究極的な選択においてこそ、よく世俗 来ないし、また二点も三点も基点があったのではテコの原理が成 だ一本の主軸に基づいてこそ、よく車輪が廻り、またただ一点を 俗の相対化、その一切の価値を悉く虚妄なるものとして否定する 立しえないようなものである。ただこのことひとつこそ真理、真 もしも二本も三本も主軸があったのでは車輪は廻転することは出 基点としてこそ、よくテコの原理が成り立つようなものである。 ということはできないし、また従って、浄土までをも見通しうる 的なものと邂遇し、その一点に立つことなくしては、あらゆる世 ようなまことの仏道は成り立ちようもない。それはあたかも、た

とこそが唯一真理であるという究極的な選択を立場としてこそよ とは不可能である。真の信仰、信心という宗教的経験は、このこ そこでは、まことの意味での信仰、信心というものは現成するこ 真実への道は決して成立することはありえないと思う。かくして して相対化、ないしは否定することは不可能であり、また従って、 るというような発想では、とうていこの一切の世俗的価値を徹底 に捉えられるべきであって、宗教的究極的な真理は数多く存在す それぞれの文化的背景に基づいて捉えられたもので、それはきわ めて複雑であり、多様多岐にわたり、その真理については多元的 世界における諸宗教が説くところの究極的な実在、真理とは、

> 保持しつつ、なお宗教多元主義をいかにして是認しうるであろう る。とすれば浄土真宗においては、そのような自己自身の立場を ように本願念仏こそが唯一絶対であるという立場に立つものであ か。更に考察をすすめることとする。 く生まれてくるものである。かくして浄土真宗においては、この

すべて縁起、因縁生起として成立していると説くものである。す 仏教においては、この宇宙世界における一切の現象、存在は、

と説かれる如く、すべての現象や存在は相依、因果の関係におい 彼なし、此れ滅するがゆえに彼滅す」(原始経典) 「此あれば彼あり、此れ生ずるがゆえに彼生ず、此なければ

的価値が否定され、またそれに即してこそ、よく仏道は成立する

それにかかわる自己の我執性、虚妄性をきびしく凝視し、それに 深くめざめるもの、親鸞の立場からいえば、その本願念仏の道に 切の現象、存在は、私自身の存在を含めて、すべて無常にして無 つつ、自己自身の存在の縁起性、無我性について深く教えられ、 おいて信心の智慧をうるものは、そういう仏法の道理に照射され 存在にほかならないということとなる。仏法を学んでその真理に 我なるものであり、それは有にして無、無にして有なる、仮なる なれば結果は消滅するというわけである。かくしてこの世界の一 よって決定される。そしてその原因やそれにかかわる条件がなく て成立するもので、結果をもたらすところの原因(因)が条件 〔縁〕をもった時にこそ結果が現出し、その在り方はその条件に

それは自己存在とまったく同じ価値をもつものとしての他者存在 ありのままに是認し、それを尊重するという視座がひらけてくる。 の発見、それに対する無条件的の承認である。そのことは聖徳太 に自己存在を相対化し、空無化しつつ、自己に対する他者存在を めざめてゆくこととなるのである。そしてそこでは必然に、つね

子の言葉でいえば「我必ず聖にあらず、彼必ず愚かにあらず、共

に是れ凡夫のみ」(『十七条憲法』)という世界である。

あったのである。 現にそのような神祇を信奉している人々の存在そのものに対して たのである。ここに親鸞における他の宗教に対する基本の姿勢が たのではなく、その神祇を信奉する人々の存在を肯定し、是認し 実在を、自己の選択した究極的真理に対等する真理として是認し あった。すなわち、その日本神道が説くところの究極的な真理、 とを曖昧にしたということではなく、神祇不拝を主張しつつも、 の不侮を語ったということは、再び神祇の崇拝を肯定し、そのこ 弟に教示したが、また同時に、神祇を侮ることがあってはならな 来の日本神道をきびしく退けて神祇不拝を主張し、そのように門 は、それを是認し、尊重すべきであると明かしたということで いとも教誡している。このように神祇不拝を主張しつつ、またそ その点、親鸞は、その念仏、信心を選択することにおいて、古

四、むすび

う世界が成立してくることとなる。

すなわち、ここでは自己自身 う如き発想には与しえないこととなる。

しかしながら、上に見た とにおいて、自己が選び取った究極的真理は唯一絶対なるもので いるところの宗教多元主義を肯定し、その主張に賛意を表したい 宗の立場に立ちながら、このような意味において、今日いわれて 在をいちおうは肯定することとなるわけである。私はいま浄土真 るが、それぞれの宗教、それが説示するところの各々の真理、 する人々の存在を肯定し是認することにおいて、間接的にではあ のとしながらも、しかも同時に、自己に対する他の諸宗教を信奉 が選択し信奉するところの、宗教的な究極的真理を唯一絶対なも 自己に対する他者の存在を無条件に肯定し、それを尊重するとい ところの縁起、無我の道理にしたがって、自己自身を相対化し、 な選択において究極的な真理を身にうるならば、仏教が教示する 如くに、仏教の立場からするならば、そのような徹底した宗教的 あって、その意味においては、宗教的真理は数多く存在するとい ととなる。そしてそこにこそ、はじめて仏道が成立するというこ いてこそ、はじめてこの世俗を超えて宗教的世界が開けてくるこ かくして浄土教、浄土真宗においては、その宗教的な選択にお

(しがらき・たかまろ、真宗学、龍谷大学名誉教授)

と思う。